

1 感性

視点① 気付く

子どもたちは様々な感覚・感性を働かせているだけでなく、感じたことを遊びや生活に取り入れていきます。言葉では表せないような「感じたこと」に気持ちを向ける子どもは、真剣に興味の対象に関わります。夢中になっていればいるほど、言葉もなく注目したり関わったりしているので、保育者が子どもの様子を見取る必要があります。「何を感じているのか」「何に気付いたのか」という視点をもって子どもを見ることは、子どもの体験の豊かさを読み取る手がかりになります。

例えば、以下の事例のような場面で「砂遊びをしていた」と見取るのではなく、「乾いている土と湿り気のある土では、色や固さが違うことに気付いて何度も試している」と見取ることで、「科学する心」が育まれる体験を探ることができます。

「水が見えなくなったよ！」 4歳児

富田林市立錦郡幼稚園

(園庭で自由に遊ぶ場面)

A児は「さら砂」作りを楽しみ、小石をトレーに敷き詰めている。その横でB児・C児・D児・E児は、**土に水をかけ、乾いている土と湿った土との色や固さの違いを感じ、気付いた**ことを何度も試している。



A児は、B児達の姿を試したくなったのか、小石を敷き詰めたトレーに水を注ぐ。すると、水が小石の下に吸収され「水が見えなくなったよ」と気づき、不思議そうに何度も水を入れる。



「さら砂」で遊んでいたF児は、水を混ぜると泥水ができることを**発見した**。



できた泥水を透明容器に入れて置く。しばらくすると、「わあ！ コーヒーが分かれてる！」と、時間が経つことで泥水が**変化した様子に気付く**。砂が沈殿し、分離していることにびっくりした様子で言葉が出る。

その後、小石を入れるとどうなるのか試す。



(関連事例P.31)